

中国の『東方雑誌』と日本の『太陽』

寇 振鋒

1. はじめに

中国の『東方雑誌』は、日露戦争開戦一ヶ月後の1904年3月11日に上海で創刊され、1948年12月に終刊となった、計44巻、816期、810冊が刊行された、足掛け45年にわたって発行された近代中国史上最大の総合雑誌である。日本の雑誌『太陽』は、日清戦争の最中の1895年1月に創刊され、1928年2月に廃刊となり、明治から昭和まで33年にわたって通刊531冊を数える近代日本の最大の総合雑誌である。

康有為、梁啓超、蔡元培、王国維、魯迅、周作人、胡適、陳独秀、李大釗、郭沫若、郁達夫、巴金等数多くの著名人が『東方雑誌』に文章を発表した。王国維の「宋元戯曲史」は『東方雑誌』の9巻10・11号、10巻3—6・8・9号に連載され、魯迅の小説「祝福」は『東方雑誌』の21巻6号に発表された。『東方雑誌』の同時代における影響力は疑うべくもない。一方では、尾崎紅葉の「侠黒奴」（原作「侠黒兎」）は第3年第1期—第3期に、広津柳浪の「美人煙草」（原作「美人蓂」）は、第3年第4期—第7期に、長谷川二葉亭訳の「憂患余生」（原作「猶太人の浮世」）は、第4年第1期—4期に、幸徳秋水の「社会主義神髓」が8巻11号—9巻3号に、それぞれ最初の中国語訳として掲載された。

中国では『東方雑誌』に関する研究が注目を集めている¹。日本では『太陽』に関する研究も増えてきている²。しかし、管見によれば、両国において、『東方雑誌』と『太陽』との関係に関する研究は、皆無に等しい。『東方雑誌』およびそれより9年早く創刊された『太陽』の両誌に関する検討は、近代中日両国のメディア交流史において大きな意義を有するものと思われる。本稿では主として初期の『東方雑誌』を取り上げ、『太陽』との相関関係を明らかにすることを目的とする。

2. 『東方雑誌』の創刊背景と日本との関わり

『東方雑誌』を刊行する商務印書館は、日本との関係がとても深かった。商務印書館は、日本の金港堂と、1903年11月から1914年1月までの足掛け12年間合弁していた³。この合弁時期は、『東方雑誌』の創刊初期にあたる。そして、『太陽』と商務印書館との関わりもかなり深かった。というのも、商務印書館によって1902年1月4日に創刊された当館初めての雑誌『外交報』は、創刊号から『太陽』の文章を訳載し始め、1911年1月15日の第300期の停刊に至るまでその訳載の文章の数は、少なくと

も 172 編にのほるからである。つまり、『太陽』が『外交報』の主な情報源の一つだったのである。

商務印書館の社長夏瑞芳は、1897 年に印刷事情を視察するため、日本に渡った。帰国後、編訳所を設立し、雑誌を創刊しようとした。そこで、商務印書館の二種目の雑誌である『東方雑誌』が編訳所の下で創刊された。『東方雑誌』はもともと、『東亜雑誌』という誌名が予定されていた。しかし、上海ではドイツの同名雑誌がすでに発行されていたため、結局、『東方雑誌』に改称された⁴。

なお、後に『東方雑誌』の主筆を務めた胡愈之が、「1904 年に出版された『東方雑誌』の創刊時に編集を主宰したのは日本人である。その中の多くの文章は日本人の手によりなったのである。」⁵と指摘していた。胡愈之がここで言う日本人には長尾雨山も含まれているであろう。長尾雨山は『東方雑誌』の第 1、2、3、5 期で四回にわたって「対客問」を掲載した。そして、この作品が「本社撰稿」欄に入っていることから、長尾雨山が東方雑誌社の身内として認められていたことは明らかである。しかも、長尾雨山の『東方雑誌』との付き合いも長かった。例えば、1911 年 3 月においても、『東方雑誌』第 8 巻第 1 号の「詩選」欄には、長尾雨山の「題倪文正公手稿後」が掲載されていた。

『東方雑誌』の創刊主旨は、「国民を導き、東アジアの連携を実現する」⁶にあり、直接的に言えば、日本と連携してロシアに対抗すること、及び立憲君主制の実現を主張する。主旨の象徴として、『東方雑誌』創刊号の口絵では「日本国皇帝睦仁」の写真が載せられていた。そして、創刊号の冒頭にある「中日分合之関係」という社説では、創刊の主旨に則って、日本と連携し、ロシアに対抗するよう清政府に要求した。要するに、『東方雑誌』は同じ東アジアにある隣国日本との関係を重視するものであった。一方、日本側には、「尚今回日清両国の提携を主義とせる月刊雑誌『東方雑誌』をも発行し、営利以外日清両国の将来の為に尽さんとせり。」⁷との記述も見られる。なお、長尾雨山には、1903 年に「上海に移住、商務印書館に入り、編訳を主宰」⁸するという履歴もあった。

しかも、長尾雨山には『太陽』との付き合いもあった。例えば、長尾雨山は 1903 年 12 月 1 日に上海へ向けて出発したようである⁹。日本を離れる一か月前の 1903 年 11 月 1 日には、第 9 巻第 13 号の『太陽』「漢詩」欄において、「九日並序」を発表した。この漢詩の掲載は、長尾雨山が『太陽』に対して関心を示したと考えられる。これにより、長尾雨山が『太陽』と『東方雑誌』との懸け橋の役割を果たした可能性も高いと言えよう。

そして、筆者の調査では、金港堂書店は、『東方雑誌』第 1 期の「新出東方雑誌簡要章程・十四」及び第 2 期から第 5 年第 6 期（1908 年 7 月）までの表紙の裏に載っ

ている代理販売所の一覧の中に記載が見られる。つまり、東京金港堂書店は『東方雑誌』の代理販売所である。なお、『東方雑誌』の表紙裏の記載によれば、この代理販売が1908年7月まで少なくとも4年余り続いていたようである¹⁰。こうしたことは『東方雑誌』と日本との深い関わりを明らかに示している。なお、商務印書館は日本の印刷技術を積極的に採用した。1903年に写真網目銅版を、また、1904年に彫刻黄楊版をそれぞれ導入した¹¹。そして、1905年に、日本人の印刷専門家を招いて、彫刻銅版、彩色石印等の最新技術を導入した¹²。そのため、商務印書館の重要な一誌である『東方雑誌』においては、日本の彫刻、印刷技術が十分活用されたと考えられるのである。

以上から、日本及び個人としての長尾雨山が『東方雑誌』の創刊において大きな役割を果たしたと推測される。つまり、『東方雑誌』の創刊においては日本及び日本人の協力が不可欠であったことは明らかである。

3. 『東方雑誌』における『太陽』表紙のデザインの模倣

数十年の刊行史を有する『太陽』と『東方雑誌』の表紙のデザインはともに、何度も変更された。

『太陽』表紙のデザインは、図1のとおり、右上角の雲間から明るい太陽の光束が現れ、地球が照らされるというものである。大きくタイトルとして右から「太陽」と掲げられ、その上に左から、「THE SUN」とある。下に口絵写真の目次がある。このデザインの表紙は、1898年12月の第4巻第25号まで続いた。

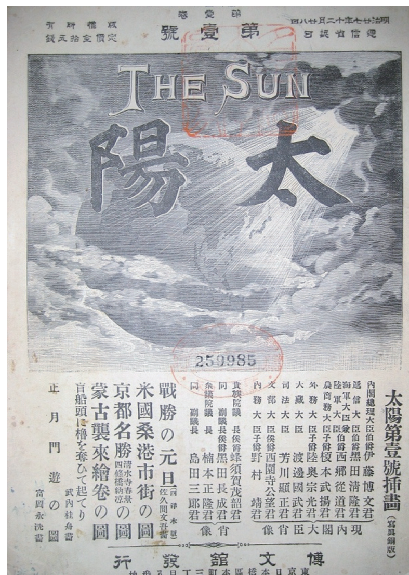


図1 (『太陽』表紙)



図2 (『東方雑誌』表紙)

『東方雑誌』の表紙は、図2のとおり、太陽と陽光と地球が現れ、太陽が海から昇って光っている。『太陽』中の右上角から照らされる明るい陽光のように、同じく右上角の雲間から現れた中国のシンボルであるドラゴンの口から、左下角まで放射状に延びている条幅が噴出される。条幅には、斜め読みで「東方雑誌」と書かれている。この条幅は『太陽』の陽光と同じデザインであると見られる。それに、両者のデザインの背景がともに雲間である。地球のデザインもほぼ同様である。ただし、『東方雑誌』のほうには経緯度が入っている。この『東方雑誌』表紙のデザインは1905年1月の第12期まで続いた。

つまり、両誌の表紙デザインは、かなり酷似していたのである。これは決して偶然だとは考えにくいだろう。アイディアのみならず、模倣の跡も明らかであると言えよう。

4. 『東方雑誌』における『太陽』の基本的性格の受容

いわゆる雑誌の基本的性格とは、その総合性である。その総合性はまた、ジャンルを通して現れてくるものである。

『太陽』は「未曾有の大雑誌」¹³と高く評価され、その総合的な性格は周知であった。第1巻（第1年）のジャンルには、「口絵」を入れて、「論説」「講演」「史伝」「地理」「政治」「法律」「小説」「雑録」「文苑」「家庭」「法律」「文学」「科学」「美術」「商業」「農業」「工業」「社会」「海外思想」「輿論一斑」「社交案内」「新刊案内」「海外彙報」「海内彙報」「英文」等が総勢24もあった。第2巻（第2年）には、「口絵」を入れて、「政治（論説、時事）」「実業」「文学」「科学」「家庭」「小説」「史伝」「地理」「教育」「宗教」「軍事」「文苑」「雑録」「雑報」と15ジャンルもあった。その総合的性格は一目瞭然だろう。

両誌のつながりに関する重要な証拠としては、『東方雑誌』創刊号の「新出東方雑誌簡要章程」の第2条において、日本の『太陽』と『Review of Review』のジャンルを模倣したことが言明されていることが挙げられよう¹⁴。これにより、『太陽』の『東方雑誌』に及ぼした影響は、疑う余地がないであろう。では、実際に、どこまで『太陽』のジャンルを模倣したかを見てみよう。

『東方雑誌』創刊号を例にすると、「口絵」「社説」「時評」「選論」「論旨」「内務」「外交」「軍事」「教育」「財政」「実業」「交通」「商務」「宗教」「雑俎」「記載」「文件」「調査」「附録」「訳件」「小説」と全部で16のジャンルがあった。『太陽』の創刊号ほど多くないが、第2巻の『太陽』とはほぼ同じである。両誌に共通している総合的特徴が一目で分かるだろう。

そして、1909年に杜亜泉が主筆になってから、『東方雑誌』の改革に着手し始めた。1911年の第7巻第12期で「辛亥年東方雑誌之大改良」通告があり、第8巻第1期か

ら改変されて、時代に合わない「論旨」が削除された。第8巻第1期の「本社之大改良」によると、「政治、法律、宗教、哲学、哲理、心理、文学、美術、歴史、地誌、理化、博物、農工、商業等諸学科の最新論著、そして詩歌、小説、雑俎、遊記等をも視野に入れ、或いは東西雑誌を翻訳し、或いは名家に著作を乞う」ように、各ジャンルを網羅した。これらのジャンルを見ると、その総合的性格は『太陽』のそれに更に接近したと言えよう。

上述のように、両者のジャンルはほぼ一致している。そして、両誌はともに、主筆の更迭に伴ってジャンルの増減もあったが、しかしその総合的性格は一貫して変わらなかった。人文科学、社会科学、自然科学等各分野にまで広がっている総合的性格が両誌の共通している特徴である。

実際には、『太陽』のジャンルをまねたのみならず、重要な点として、その総合的性格まで模倣したことが挙げられる。つまり、『東方雑誌』の総合性という基本的性格は『太陽』のそれを模倣した結果なのである。

5. 『東方雑誌』における『太陽』文章の掲載本数とその訳者

本論の末尾に附けた対照表は主に1904年3月の第1期から1935年12月の第32巻第24号までの『東方雑誌』を調査したうえで筆者が作成したものである。なお、第32巻第24号以後の『東方雑誌』については確認できていない。しかし、『太陽』が1928年3月に廃刊となったため、それ以後は『太陽』からの訳載はなくなった可能性が高いと考えられる。この両誌の対照表を通して、『太陽』から転載された文章の本数及びその訳者を把握することができる。

訳載された文章の本数は、1904年12月の第11期から1920年1月の第17巻第1号までの間に集中している。ただし、この間には、辛亥革命のために『東方雑誌』は1911年11月から1912年4月までの半年間休刊した。

対照表を見れば、55冊の『東方雑誌』には54冊の『太陽』から66編の文章が訳載されていることが分かる。その中に2編がそれぞれ2回にわたって連載されているため、66編の『太陽』文章が68回に訳載されていることも明らかである。そして、『東方雑誌』に掲載されている『太陽』の文章は他誌からの転載が5編で、外部からの寄稿が2編である。

ほとんどの訳者が本名を名乗っていないことから、主な訳者の本名及び基本データを明らかにする必要があるだろう。結論を先に述べると、主な訳者は杜亜泉、章錫琛、許家慶の三人に限られている。

まず『東方雑誌』の主筆を11年間務めた杜亜泉について確認してみよう。1900年に杜亜泉は「中国史上初の科学雑誌」¹⁵と言われる『亜泉雑誌』を創刊し、独学で日本

語を勉強して、日本の科学書を購読していた¹⁶。なお、蔡元培の記載によると、杜亜泉が紹興の中西学堂で教員をしていた当時、二人で一緒に「多く日本語の本や雑誌を読み、間接的に世界の新思潮をうかがい知ろうとした」¹⁷とされる。杜亜泉が日本語の書籍を読解する能力を有したことに関する証言はその他にもある。例えば、鄭貞文は、「杜亜泉は日本語を読むことができた。商務館初期の理化学科書籍はすべて、杜亜泉によって日本語の書籍を参考にして編集された。」¹⁸と述べている。

杜亜泉は1904年に張元済の紹介で商務印書館に入り、編訳所の理化部主任を担当した。1906年に教育事情を視察するために日本を旅行した。滞在の期間は不明であるが、日本から数十種類の書籍を購入し帰国した¹⁹。

胡愈之によると、『東方雑誌』における「僉父」と「高勞」がともに杜亜泉のペンネームである²⁰。つまり、杜亜泉が『太陽』から翻訳した文章は合わせて9編である。日本語ができる杜亜泉は、主筆を務めながら、『太陽』所収の文章の翻訳に携わったのである。杜亜泉は『太陽』の文章を翻訳したのみならず、『新日本』『外交時報』『大阪毎日新聞』『支那』等からも文章を翻訳した。杜亜泉はまた、幸徳秋水の代表的著作『社会主義神髓』を5回にわたって『東方雑誌』の8巻11号—9巻3号に訳載した。「幸徳秋水著、高勞訳」と署名される『社会主義神髓』は1923年11月に、「東方雑誌20周年記念刊物」として商務印書館より単行本として刊行された。

次に、もう一人の重要な訳者である章錫琛を見てみよう。章錫琛は、開明書店の創業者である。その前に商務印書館で15年間編集に従事していた。主に杜亜泉の『東方雑誌』の編集に協力した。章錫琛はまた、杜亜泉の要請で日本語の翻訳を始めた²¹。『東方雑誌』における「君実」は章錫琛の字であり²²、彼は、『太陽』から22編の文章を漢訳した。章錫琛も『太陽』のほかに、『外交時報』『東京朝日新聞』『万朝報』『中央公論』『新日本』『東京日々新聞』『日本及日本人』『支那』『地学雑誌』『東亜之光』『衛生学報』等多くの日本の雑誌や新聞から文章を選びすぐり翻訳した。

なお、章錫琛はまた、本間久雄の『文学批評論』（原著『新文学概論』新潮社1917年11月）を翻訳した。訳文は1925年に商務印書館より単行本として発行され、1928年に4版まで刊行された²³。そして、章錫琛は、本間久雄の『婦女問題十講』（原著『婦人問題十講』東京堂1923年5月）を翻訳した。つまり、章錫琛はその日本語の翻訳業績から言えば、翻訳家と呼ぶべきであろう²⁴。

しかし、『太陽』から17編の文章を漢訳したもう一人の訳者許家慶に関しては、現時点では誰のことかまだ明らかにはできない。文章の訳載期間から見ると、杜亜泉が主筆になってからの1911年5月の第8巻第3号から、許家慶は、『東方雑誌』の訳業に携わり始めたが、しかし1917年1月の第14巻第1号から許家慶の訳文は見られなくなった。許家慶も同じく『東方雑誌』の日本語文献の重要な訳者の一人である。『太

陽』以外、『実業之日本』『東京日々新聞』『朝日新聞』『衛生新報』『外交時報』『新日本』『地学雑誌』『日本及日本人』『中央公論』『理学界』等から多くの文章を翻訳した。

以上の三人の訳者は66編中の48編の翻訳を担当した。つまり、7割以上がこの三人の手によったのである。この三人がともに『太陽』の愛読者であったことは間違いないだろう。そして、『太陽』の冊数と期間からすると、商務印書館或いは東方雑誌社は、『太陽』を定期購入していたと考えられる。なお、その他の11人の訳者及び周宝華、忠民のような一般寄稿者も『太陽』の愛読者であったと思われる。一方、『太陽』の広告には「内外の読者数十万に及ぶ」²⁵という文言も見られる。その中には中国の読者も含まれていると考えられよう。換言すると、『太陽』の当時の中国での伝播及び影響範囲は、かなり広がったものと言えよう。

つまり、当時、多くの日本の雑誌や新聞が『東方雑誌』の主な情報源となったが、『太陽』はその中で最も強い影響力をもたらした重要な一誌だったのである。

6. 『東方雑誌』に掲載されている『太陽』の文章について

対照表を通して文章の掲載期間を見ると、『東方雑誌』に掲載された『太陽』の文章が主に、辛亥革命の1910年から1919年までの間に集中していることが分かる。それに対応して、『太陽』掲載の原文は、第17巻2号から第25巻13号までに集中し、期間も同じく、1910年から1919年までの間である。これにより、『東方雑誌』が『太陽』から最新の情報を素早く入手したことが分かるだろう。一例を挙げてみよう。1915年5月の第12巻第5号『東方雑誌』に掲載されている章錫琛訳の長文「欧洲大戦与中立各国之態度」の原文は、4ヶ月前の1915年1月の第21巻第1号『太陽』に掲載された「戦乱と中立各国の態度」である。当時の事情からすると、決して翻訳のスピードが遅いとは言えない。章錫琛は9千字余りの原文を6千字余りの文語文に翻訳した。文章は完全に原文に忠実な翻訳である。曖昧なところが若干あるが、しかしほとんど正確であった。ただし、原文における六つの挿絵が章錫琛の訳文において見当たらない。当然、すべての訳文が忠実な訳ではなく、抄訳した文章もある。例えば、「節訳（つまり抄訳）」と明記された文章は7編ある。

なお、『東方雑誌』は激動の時代故に、発行遅延の可能性があった。例えば、「欧州最近之外交」と「法蘭西共和党之分裂」を掲載している第10巻5号と第10巻10号の『東方雑誌』の発行日はそれぞれ『太陽』の発行日と全く同じとなっており、この事実はそのまますべて受け入れ難いものだと言える。そして、その後の1919年と1920年に発行された『東方雑誌』では発行の月日がすべて消えている。こうなった理由は遅延を隠すためであると思われる。つまり、『東方雑誌』の発行には遅延があると推測し得よう。

では、なぜこの時期の『太陽』の文章が注目されるのかを考察してみよう。

その理由はまず、この時期の主筆を通してうかがうことができる。この時期の主筆は杜亜泉であった。杜亜泉時代の『東方雑誌』は、1909年2月の第6巻第1期から1920年7月の第17巻14号までである²⁶。これはほぼ、『太陽』の「第二の黄金時代」²⁷と言われる浮田和民時代（1909年2月—1917年5月）及び浅田江村時代（1917年6月—1923年9月）にあたる。

杜亜泉は『東方雑誌』の主筆になってから、1911年3月の第8巻第1号より誌面の大刷新を行って、判型を四六倍判にし、挿絵をたくさん入れて、『東方雑誌』を大判雑誌に変貌させた。そして、大刷新に伴って、『太陽』の文章の訳載が顕著に増えるようになった。

しかし、中国と西洋との調和を主張する杜亜泉は全面的西洋化を唱える陳独秀と、1918—1919年に「東西文化調和論」をめぐる論戦を行ったため、1920年に主筆の辞任を余儀なくされた。そして、杜亜泉の辞職に伴って、『太陽』からの文章の訳載も中断された。

主筆杜亜泉の役割については、『東方雑誌』は先生の懐の下で育てられたのである²⁸と高く評価されていた。つまり、『東方雑誌』は杜亜泉の主宰の下で、草創期から成熟期に入ることができ、近代中国に強い影響力をもたらした一大総合雑誌となったのである。その際に主な情報源としての『太陽』の役割も否定できないであろう。杜亜泉が主筆になった1909年より前に『東方雑誌』には『太陽』の文章としては『外交報』から転載されたものが2編あるだけであった。しかし、杜亜泉が主筆になってから、3編の転載文章以外の61編はすべて、直接『太陽』から漢訳された。要するに、日本語のできる杜亜泉が主筆を務めていたことが、『太陽』からの文章の訳載が盛んになった理由の一つであろう。

そして、『東方雑誌』に『太陽』のどのような文章が掲載されたのかについても、やはり後掲の表を通して見ることができる。欧米諸国及び第一次世界大戦に関する文章が8割近くを占めている。

なぜ『太陽』を通して欧米に関する文章が多く訳載されたのだろうか。その理由は、やはり当時の激動する世界情勢と切り離せないだろう。当時の時代背景はあまりにも複雑であった。1911年に辛亥革命が起き、1914年に第一次世界大戦が勃発し、1915年より新文化運動が始まり、1917年にロシア革命が起こり、1918年に第一次世界大戦が終戦し、1919年に五四運動が起こった。国内外の情勢が激変している環境においては、世界情勢に関する文章の訳載も時代の反映と言えよう。このような時代背景は、特定のタイプの文章が集中する主な理由であるのみならず、上述の時期に集中する要因である。

浮田和民時代の『太陽』は、「第二次立憲主義的論調の時代」²⁹と位置付けられる。一方、杜亜泉も立憲思想をもつ主筆であり、辛亥革命後には、また国際的視野を有するようになった。そして、浮田和民も国際的視野を有する人物である。博文館館主の大橋新太郎が半年間の欧米視察から帰国し、国際的視野を有した浮田を編輯主幹に推挙した³⁰。浮田が主筆になってからの『太陽』は、1911年1月の17巻1号から誌面構成上の改革を行い、オピニオン誌の色彩が強くなった³¹。そして、浮田を継いだ主筆の浅田江村は、「革命思想や革命に対するアレルギーが顕著」³²な思想の持ち主である。主筆の思想が雑誌の思想に相当するといえる。このような『太陽』の性格については、『太陽』の文章の訳者兼『東方雑誌』の主筆である杜亜泉が熟知していたであろう。『太陽』の誌面刷新の二ヶ月後に、『東方雑誌』も、1911年3月の第8巻1期から誌面の大刷新を行い、国際情勢に注目し始めた。

そして、国際情勢に関する文章の大量訳載は、主筆の思想及び雑誌の主旨と深く関わっている。第8巻1期における「本社之大改良」では、雑誌の主旨が「近くの我が国から、世界まで広く及ぶ。凡そ世界上の変動、社会上の潮流、国際上の関係に対して、必ずそのいきさつを求め、その顛末を詳細にする」にあるとした。つまり、『東方雑誌』は、創刊号にある「東アジアの連携を実現する」という主旨から、欧米諸国の外交動向及び政局変化に注目することに一変した。

『東方雑誌』は国際問題に対する紹介や分析が鋭く、文章の訳載も、迅速かつ適切であった。これは、同時代の他の定期雑誌が及ばないものだった。そのため、『太陽』の果たした役割がいかに大きかったか、容易に想像がつくであろう。

以上から分かるように、両誌の主筆の思想、ないし雑誌の主旨がほぼ一致していたのである。杜亜泉が『太陽』に注目し、その文章を大挙して採録したゆえんである。そして、東方雑誌社は当時からつとに著作権を意識していたと思われる。例えば、文章の出典については必ず少なくとも雑誌名、新聞名までは明記した。しかも、巻号及び原作者まで明記する訳文も少なくなかったのである。この点に関しても注目すべきであろう。

7. 『東方雑誌』に掲載されている『太陽』文章の挿絵

後ろの対照表に示してあるように『東方雑誌』に掲載されている『太陽』の訳文にはほとんど、挿絵が載っている。つまり、66編の文章には、連載回数で数えると半分弱の31に挿絵が付いている。一方、これに対応する『太陽』の原文には9編だけに挿絵が見られる。それでは、『太陽』の挿絵はそのまま使用されていたのであろうか。この点についても、追究しなければならないだろう。

例えば、10巻10号の『東方雑誌』に掲載されている「法蘭西共和党之分裂」と「説

鐮」の挿絵は、『太陽』の原文のそれと同じようであるが、写真のズームをよく見ると違う挿絵だと思われる。実際に『太陽』の挿絵をそっくり使っているものは、10巻9号『東方雑誌』に載っている「文明国下之秘密島」だけである。原文における5枚の写真中の4枚が完全にそのまま使われている。1枚だけは、下図を見て分かるように、原文中の元の写真の左側の部分を切り捨てて使用されている。



(第四図メドース氏撮影の土人)
(19巻16号『太陽』)



(梅度斯所撮影之土人)
(10巻9号『東方雑誌』)

つまり、『東方雑誌』は『太陽』の文章を訳載したが、しかし原文中の挿絵をほとんど使わなかった。換言すると、『東方雑誌』に訳載された『太陽』文章における挿絵はほとんど、訳出時に中国人によって加えられたものである。元々原文にある挿絵をそのまま使用したという誤解を招かないようにその旨を明記すべきであろう。読者を魅了するために、『東方雑誌』は、原文に存在しない挿絵をわざわざ付したのである。

8. 『東方雑誌』に連載されている『太陽』の小説とその訳者

筆者の調査によれば、創刊から杜亜泉時代までの『東方雑誌』に掲載されている日本の小説は「侠黒奴」「美人煙草」「憂患余生」の3篇だけである。銭智修が主筆になってからの1921年3月の第18巻第6号から、日本の小説の翻訳は増える傾向にあった。これにより、初期の『東方雑誌』が時事評論を重視していたことが分かるだろう。

「侠黒奴」(原作、尾崎紅葉「侠黒兎」)は第3年第1期(1906年2月18日)―第3

期（4月18日）に、「美人煙草」（原作、広津柳浪「美人苺」）は、第3年第4期（同年6月16日）—第7期（8月14日）に、「憂患余生」（長谷川二葉亭訳「猶太人の浮世」、原作者ゴーリキー）は、第4年第1期（1907年3月9日）—4期（6月5日）に、掲載されている。「美人煙草」と「憂患余生」はまた、『太陽』から翻訳された。広津柳浪の「美人苺」の漢訳は1905年9月第11巻12—13号の『太陽』に掲載され、二葉亭四迷訳の「猶太人の浮世」は1905年2月第11巻2号の『太陽』に掲載された³³。

以上の小説訳者はすべて呉椿である。呉椿は清末民初の著名な翻訳家である。彼は、主に日本の小説を翻訳したほかに、ロシア、イギリスの小説をも翻訳した。呉椿は、『東方雑誌』に載っている2篇以外に、少なくとも6篇の小説を『太陽』から翻訳した³⁴。呉椿は当時、『太陽』の愛読者であったに違いない。しかも、呉椿によって翻訳された小説は『太陽』から翻訳した小説を含めて、ほとんどが、中国での初訳であった。

9. おわりに

以上の考察を通して、主として杜亜泉を主筆とした初期の『東方雑誌』と『太陽』との相関関係を明らかにした。主な結論は、以下の通りである。

まず、『東方雑誌』の創刊は日本と深く関わっていた。『東方雑誌』は日本人の協力の下で創刊されたのであり、敢えて言えば、中日合作の産物であった。商務印書館と合併した金港堂書店が『東方雑誌』の日本での代理販売所であった。そして、「雑誌」という言葉自体もまた、日本語から借用したものである³⁵。商務印書館の『外交報』にはまた、170編余りの『太陽』の文章が訳載されていた。『東方雑誌』の母体である商務印書館と『太陽』との関わりはかなり深いと言えよう。

次に、『東方雑誌』の表紙の基本的デザインが『太陽』のデザインを模倣したことを指摘した。それだけではなく、『太陽』の掲載文章のジャンルまで模倣した。『東方雑誌』の総合雑誌という基本的性格は、『太陽』を参考にしたうえで形成されたのである。

最後に、『東方雑誌』における『太陽』から訳載されている文章の数は、計66編である。1920年までの初期『東方雑誌』に掲載された3篇の小説中の2篇は『太陽』から翻訳したものである。そして、文章の主な訳者もほぼ明らかになった。日本語に堪能な杜亜泉が主筆を務めたことが、『太陽』の文章が多く訳載された要因である。なお、訳載した文章の種類から見ると、『東方雑誌』は読者に世界情勢を知らしめるため、近隣日本の総合雑誌『太陽』の文章を積極的に取り入れたと思われる。両誌において共通している総合的性格故に、『太陽』が『東方雑誌』の重要な最新の情報源となったと言えよう。

要するに、両誌の相関関係は、近代中日両国のマスメディア交流史において、日本が中国に一方的に影響を及ぼした重要な一例であり、その架け橋的な役割は無視でき

ないものである。総合雑誌としての『太陽』の成功が、『東方雑誌』に模倣すべきモデルを提供したのである。実際に、近代中国のメディアの最前線としての上海で刊行された『外交報』『東方雑誌』等のみならず、北京の『経済叢編・北京雑誌』、広州の『嶺南報』のような北から南まで多数の雑誌において『太陽』からの文章が訳載されている。つまり、『太陽』が近代中国のマスメディアに及ぼした影響がかなり深く広がっていたことは明らかだろう。

訳文・原文対照表

『東方雑誌』	『太陽』
発行年 / 月日巻号・訳者・文章題名	原題・発行年月日・巻号
1904 年 12 月 31 日第 11 期 匿名 「論豫定満洲政策」 (第 96 期『外交報』より転載)	「満洲政策の豫定を要す」1904 年 10 月 1 日 10 巻 13 号
1905 年 8 月 25 日 2 年 7 期 匿名 「荷日通商逸事」 (第 105 期『外交報』より転載)	「外交逸事」1904 年 12 月 1 日 10 巻 16 号
1910 年 5 月 4 日 7 年 3 期 匿名 「記美国近時政界」 7 月 1 日 7 年 5 期 為人 「現代生活之研究」 7 月 1 日 7 年 5 期 匿名 「美国政界暗潮」	「米国近時の政界」1910 年 4 月 1 日 16 巻 5 号 「現代生活の研究」1910 年 6 月 1 日 16 巻 8 号 不明
1911 年 5 月 23 日 8 巻 3 号 父 「外交之新局面」 5 月 23 日 8 巻 3 号 父 「東西洋社会根本之差異」	「外政の新局面」1911 年 4 月 1 日 17 巻 5 号 「彼我社会の根本的差異」1911 年 2 月 1 日 17 巻 2 号
1912 年 4 月 1 日 8 巻 10 号 高 勞 「東洋最初之共和国」 4 月 1 日 8 巻 10 号 匿名 「美国政党小観」 (『大共和日報』より転載) 6 月 1 日 8 巻 12 号 章燮臣 「德国社会党之勝利」 7 月 1 日 9 巻 1 号 許家慶 「露漱芬勞都斯克娜夫人之自白」 8 月 1 日 9 巻 2 号 許家慶 「英国煤鉱工人之同盟罷業」(付図) 10 月 1 日 9 巻 4 号 葆 靈 「耐奇世界和平財団」 11 月 1 日 9 巻 5 号 許家慶 「英人統治印度策」 11 月 1 日 9 巻 5 号 匿名 「世界偉人之二大競争」 (『大共和日報』より転載)	「東洋最初の共和国」1912 年 2 月 1 日 18 巻 2 号 「米国の政党小観」1910 年 1 月 20 日 16 巻 2 号 「独逸社会党の勝利」1912 年 4 月 1 日 18 巻 5 号 「ルイゼ・フォン・トスカナの自白」1912 年 5 月 1 日 18 巻 6 号 「英国炭坑夫の同盟罷業に就いて」1912 年 7 月 1 日 18 巻 10 号 「カーネギー平和財団」1912 年 4 月 1 日 18 巻 5 号 「印度統治論」1902 年 11 月 5 日 8 巻 14 号 「世界の偉人たる二大競争」1912 年 8 月 1 日 18 巻 11 号
1913 年 2 月 1 日 9 巻 8 号 憶 蕙 「論飛機と飛艇之優劣」 3 月 1 日 9 巻 9 号 呉 棹 「支那之将来」 6 月 1 日 9 巻 12 号 章 錫 「印度人民之不平」(付図) 7 月 1 日 10 巻 1 号 許家慶 「世界軍備趨勢転変」(付図) 11 月 1 日 10 巻 5 号 許家慶 「欧洲最近之外交」(付図)	「飛行機と飛行船の優劣」1912 年 12 月 1 日 18 巻 16 号 「支那の将来」1913 年 1 月 1 日 19 巻 1 号 「不平満々たる印度三億の民衆」1913 年 3 月 1 日 19 巻 3 号 「世界軍備趨勢の転機」1913 年 4 月 1 日 19 巻 5 号(付図) 「欧州最近の外交」1913 年 11 月 1 日 19 巻 14 号

<p>1914 年</p> <p>3 月 1 日 10 卷 9 号 章錫 「文明国下之秘密島」(付図)</p> <p>4 月 1 日 10 卷 10 号 許家慶 「法蘭西共和党之分裂」(付図)</p> <p>4 月 1 日 10 卷 10 号 陳文祥 「説錫」(付図)</p> <p>12 月 1 日 11 卷 6 号 許家慶 「從戰術上評論歐洲戰爭之經過」(付図)</p>	<p>「邦人の探検を待つ秘密島」1913 年 12 月 1 日 19 卷 16 号 (付図)</p> <p>「重大なる仏蘭西の政局」1914 年 4 月 1 日 20 卷 4 号 (付図)</p> <p>「ラヂウムの話」1914 年 1 月 1 日 20 卷 1 号 (付図)</p> <p>「戦術上より見たる欧州戦争の経過」1914 年 10 月 1 日 20 卷 12 号 (付図)</p>
<p>1915 年</p> <p>2 月 1 日 12 卷 2 号 章錫 「德意志之将来」</p> <p>5 月 10 日 12 卷 5 号 章錫 「欧洲大戰と中立各国之態度」</p> <p>6 月 10 日 12 卷 6 号 高 勞 「日人之開發中国富源論」</p> <p>9 月 10 日 12 卷 9 号 章錫 「力と道理」</p> <p>10 月 10 日 12 卷 10 号 許家慶 「軍国主義之将来」</p> <p>11 月 10 日 12 卷 11 号 章錫 「德俄接近論」(付図)</p> <p>12 月 10 日 12 卷 12 号 許家慶 「大戰中羅馬教皇之態度」(付図)</p> <p>12 月 10 日 12 卷 12 号 許家慶 「土德關係与巴爾干之向背」(付図)</p>	<p>「独逸の将来」1914 年 10 月 1 日 20 卷 12 号</p> <p>「戦乱と中立各国の態度」1915 年 1 月 1 日 21 卷 1 号</p> <p>「対支那親(富源開發問題に就いて)」1915 年 5 月 1 日 21 卷 5 号</p> <p>「力と道理」1915 年 7 月 1 日 21 卷 9 号</p> <p>「軍国主義の将来」1915 年 8 月 1 日 21 卷 10 号</p> <p>「露独接近論」1915 年 8 月 1 日 21 卷 10 号</p> <p>「独逸皇の羅馬法王」1915 年 10 月 1 日 21 卷 12 号 (付図)</p> <p>「土德關係と巴爾幹の向背」1915 年 10 月 1 日 21 卷 12 号</p>
<p>1916 年</p> <p>1 月 10 日 13 卷 1 号 章錫 「德人在俄之勢力」(付図)</p> <p>2 月 10 日 13 卷 2 号 許家慶 「大戰と婦人問題之将来」(付図)</p> <p>4 月 10 日 13 卷 4 号 章錫 「欧米大学之過去与現在」</p> <p>6 月 10 日 13 卷 6 号 許家慶 「英德兩國顏料業盛衰之原因」(付図)</p> <p>6 月 10 日 13 卷 6 号 許家慶 「論新加坡暴動案」(付図)</p> <p>7 月 10 日 13 卷 7 号 章錫 「欧洲戦争と労働運動」(付図)</p> <p>7 月 10 日 13 卷 7 号 許家慶 「英德兩國顏料業盛衰之原因」(付図)</p> <p>8 月 10 日 13 卷 8 号 章錫 「欧洲戦争と労働運動」(付図)</p> <p>9 月 10 日 13 卷 9 号 章錫 「大戰後之殖民地問題」(付図)</p> <p>9 月 10 日 13 卷 9 号 許家慶 「英国吉青納元帥之生平」(付図)</p> <p>10 月 10 日 13 卷 10 号 許家慶 「戦後遠東列強之地位」(付図)</p> <p>10 月 10 日 13 卷 10 号 許家慶 「海戦術之新傾向と造艦政策」(付図)</p> <p>12 月 10 日 13 卷 12 号 許家慶 「紙之学問と物之学問」</p>	<p>「露西亜に於ける独逸の勢力」1915 年 9 月 1 日 21 卷 11 号</p> <p>「欧州戦争と婦人問題の将来」1915 年 10 月 1 日 21 卷 12 号</p> <p>「欧米大学の制度及組織」1913 年 9 月 1 日 19 卷 12 号</p> <p>「英国化学大家と染料問題」1916 年 2 月 1 日 22 卷 2 号</p> <p>「新加坡暴動鎮圧事件」1916 年 4 月 1 日 22 卷 4 号</p> <p>「欧洲戦争と労働運動」1916 年 4 月 1 日 22 卷 4 号</p> <p>「英国化学大家と染料問題」1916 年 2 月 1 日 22 卷 2 号</p> <p>「欧洲戦争と労働運動」1916 年 4 月 1 日 22 卷 4 号</p> <p>「大戰後の植民地問題」1916 年 6 月 15 日 22 卷 8 号</p> <p>「噫キッパ-元帥」1916 年 7 月 1 日 22 卷 9 号 (付図)</p> <p>「戦後極東における列強の地位」1916 年 7 月 1 日 22 卷 9 号</p> <p>「海戦術の新傾向と造艦政策」1916 年 7 月 1 日 22 卷 9 号</p> <p>「紙の学問と物の学問」1916 年 10 月 1 日 22 卷 12 号</p>
<p>1917 年</p> <p>3 月 15 日 14 卷 3 号 君 実 「日人對於中日親善論之意見」</p> <p>7 月 15 日 14 卷 7 号 周宝華 「論中日軍備之關係」</p> <p>8 月 15 日 14 卷 8 号 君 実 「論戦後之世界和平耐久策」(付図)</p> <p>8 月 15 日 14 卷 8 号 忠 民 「欧洲大戰之里面觀察」(付図)</p> <p>9 月 15 日 14 卷 9 号 君 実 「中日親善之根本義」</p> <p>9 月 15 日 14 卷 9 号 風 欠 「空軍部創設論」(付図)</p> <p>10 月 15 日 14 卷 10 号 君 実 「西班牙之危機」(付図)</p> <p>11 月 15 日 14 卷 11 号 高 勞 「美国之参戦と戦後之變動」(付図)</p>	<p>「挙国一致の外政策」1917 年 1 月 1 日 23 卷 1 号</p> <p>「日支軍備の關係を論ず」1917 年 3 月 1 日 23 卷 3 号</p> <p>「戦後に於ける世界平和耐久策を論ず」1917 年 6 月 1 日 23 卷 6 号 (付図)</p> <p>「世界大戰の史的觀察と我國民将来の覚悟」1917 年 6 月 15 日 23 卷 7 号</p> <p>「日支親善の根本義」1917 年 6 月 15 日 23 卷 7 号</p> <p>「空軍大臣の新設を論ず」1917 年 6 月 15 日 23 卷 7 号</p> <p>「西班牙の危機」1917 年 8 月 1 日 23 卷 9 号</p> <p>「米国の参戦と戦後の變動」1917 年 9 月 1 日 23 卷 10 号</p>

1918 年 6 月 15 日 15 卷 6 号 君実 「最近亜米利加之食料政策」 7 月 15 日 15 卷 7 号 抱石 「英法海峡隧道と現時之戦争」 (『鉄道協会会報』より転載) 8 月 15 日 15 卷 8 号 君実 「德国之政変と媚和思想」 (付図) 10 月 15 日 15 卷 10 号 君実 「猶太人之未来」 11 月 15 日 15 卷 11 号 高勞 「新亜細亜主義」 11 月 15 日 15 卷 11 号 君実 「空中戦争之現在及将来」 (付図)	「最近亜米利加之食料政策」1918 年 2 月 1 日 24 卷 2 号 「英仏海峡隧道と現時の戦争」1918 年 1 月 1 日 24 卷 1 号 「独逸政変の顛末と講和思潮の真相」1918 年 6 月 1 日 24 卷 7 号 (付図) 「猶太人の未来」1918 年 6 月 15 日 24 卷 8 号 「新亜細亜主義」1918 年 7 月 1 日 24 卷 9 号 「空中戦の現在及び将来」1918 年 7 月 1 日 24 卷 9 号
1919 年 16 卷 3 号 君実 「輓近之神秘主義」 16 卷 4 号 高勞 「德意志屈服之原因」 16 卷 6 号 高勞 「中等階級論」 16 卷 7 号 君実 「俄国過激派統治之内容」(付図) 16 卷 8 号 高勞 「歴史上之世界支配者」 16 卷 9 号 君実 「西伯利亚鉄路之現状」 16 卷 11 号 網如 「第二段之世界改造」 16 卷 12 号 君実 「鄂穆斯克政府建設史」(付図)	「輓近の神秘主義」1918 年 5 月 1 日 24 卷 5 号 「独逸の屈伏と講和問題」1918 年 12 月 1 日 24 卷 14 号 「社会問題としての中等階級問題」1919 年 4 月 1 日 25 卷 4 号 「露国過激派統治の内容」1919 年 3 月 1 日 25 卷 3 号 「歴史より見たる世界支配」1919 年 6 月 1 日 25 卷 7 号 「西伯利亚鉄道に就いて」1919 年 3 月 1 日 25 卷 3 号 「第二段の世界改造」1919 年 8 月 1 日 25 卷 10 号 「オムスク政府建設史」1919 年 7 月 1 日 25 卷 9 号
1920 年 17 卷 1 号 昔塵 「朝鮮文化史上之光輝」	「朝鮮文化史上之光輝点」1919 年 11 月 1 日 25 卷 13 号

この対照表は、『東方雑誌』第 1 期～32 卷 24 号（東方雑誌社・商務印書館、1904 年 3 月～1935 年 12 月）、『中国近代期刊篇目彙録』第 2 卷中（上海書店編、上海人民出版社、1981 年 6 月）と『太陽』1 卷 1 号～34 卷 2 号（博文館、1895 年 1 月～1928 年 2 月）、『太陽』CD-ROM 版（八木書店、1999 年 12 月）に基づく。

注

- 例えば、黄良吉『東方雑誌之刊行及其影響之研究』台湾商務印書館 1969 年 1 月。洪九来『寛容与理性：「東方雑誌」的公共輿論研究（1904—1932）』上海人民出版社 2006 年 11 月。王征『「東方雑誌」在清末（1904—1911）的歷史文化身份』（修士学位論文）上海外国語大学 2007 年 6 月。石雅潔『「東方雑誌」辦刊特色研究』（修士学位論文）上海社会科学院 2007 年 7 月。
- 例えば、鈴木正節『博文館「太陽」の研究』アジア経済研究所 1979 年 5 月。永嶺重敏「明治期『太陽』の受容構造」『出版研究』21 号 1991 年 3 月。鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』思文閣出版 2001 年 7 月。
- 樽本照雄『初期商務印書館研究』増補版、清末小説研究会 2004 年 5 月 p.435。本書においては、商務印書館と金港堂との合併に関して詳しく考証されている。
- 張樹年主編『張元濟年譜』商務印書館 1991 年 12 月 p.47。
- 胡愈之「回憶商務印書館」『商務印書館九十五年：我和商務印書館：1897—1992』商務印書館 1992 年 1 月 p.115。
- 『東方雑誌』第 1 期、1904 年 3 月。

- 7 「清国に於ける金港堂の事業」『教育界』第3巻第1号 1903年11月3日。
- 8 長尾正和「著者略歴」『中国書画話』筑摩書房 1965年3月 p.379。
- 9 前掲樽本照雄『初期商務印書館研究』増補版 p.271。
- 10 金港堂書店は、『東方雑誌』の創刊号から第5年第6期（1908年7月）までの代理販売所の一覧の中に入っているが、しかし第5年第7期から代理販売所の一覧には国内の数か所だけ載せられているようになったため、その後は代理販売が続いていたかどうかは不明である。
- 11 樽本照雄「初期商務印書館年表」前掲『初期商務印書館研究』増補版。
- 12 前掲胡愈之「回憶商務印書館」p.115。
- 13 『都新聞』第3002号 1895年1月8日。『大阪毎日新聞』第4007号 1895年1月23日。
- 14 「新出東方雑誌簡要章程・二」『東方雑誌』第1期。
- 15 胡愈之「追悼杜亜泉先生」『東方雑誌』第31巻1号 1934年11月。
- 16 章錫琛「漫談商務印書館」『商務印書館九十年：我和商務印書館：1897—1987』商務印書館 1987年1月 p.112。袁翰青「自学有成的科学編訳者杜亜泉先生」前掲書 p.84。
- 17 高平叔編『蔡元培全集』第6巻中華書局 1988年8月 p.359—360。
- 18 鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」前掲『商務印書館九十年：我和商務印書館：1897—1987』p.201。
- 19 姚遠「國人自辦科学期刊之父杜亜泉」『科学時報』2008年3月20日。
- 20 胡愈之「追悼杜亜泉先生」
- 21 章錫琛「從辦學校到進入商務編訳所」『商務印書館九十五年』p.101。そして、章によると、『東方雑誌』第8巻11号に掲載された章の最初の日本語からの訳文「鏽錠發明者居里夫人小傳」は、杜亜泉に添削された後に「高勞」と署名されたとのことである。
- 22 吳永貴「章錫琛、可敬的精明与気度」『光明日報』2006年12月20日。
- 23 傅莹「外来文論の訳介及其对中国文論の影響——從本間久雄的『新文学概論』訳本談起」（『暨南學報』第23巻第6期 2001年11月）を参照されたい。但し、傅論文は、原著を明らかにせず、また、原著の刊行年が1916年としているのは誤りである。
- 24 すでに編輯者、出版者と認められている（張漢文「有才干、有胆識的編輯家、出版家——簡括章錫琛先生正義愛國、勤懇務実、樂于助人的一生」『新聞出版交流』2001年第2期）。
- 25 『太陽』第4巻25号 1898年12月。ただし、この数に関しては誇大であろう（鈴木正節前掲書 p.4。鈴木貞美前掲書 p.9を参照されたい）。
- 26 編輯者が「華陽陳仲逸」と署名されたものもあるが、この陳仲逸は杜亜泉の別名である（章錫琛「漫談商務印書館」前掲書 p.112）。なお、胡愈之の「追悼杜亜泉先生」によると、杜が9年の主筆を務めた。そして、最新研究成果としての石雅潔の前掲碩士論文（p.9）によれば、杜が主筆になった期間は、1906年6月の第6巻第5号から1919年10月までである。しかし、筆者が自ら名古屋大学付属図書館所蔵の『東方雑誌』を調査した結果によると、少なくとも1906年2月（第6年第1期、「編輯者 華陽陳仲逸」）から1920年7月（第17巻14号「編輯者 華陽陳仲逸」）までの11年半近くに及んでおり、石の指摘には誤りがある。なお、第17巻17号から編輯者が「錢智修」と署名されている。編輯者が変わり次第、明記されるはずであるが、しかし第15、16号には編輯者が載っていないため、杜の編集が1920年8月の第17巻16号まで続いている可能性も高いと思われる。
- 27 鈴木正節前掲書 p.21。
- 28 前掲「追悼杜亜泉先生」。
- 29 鹿野政直「太陽——主として明治期における——」『思想』450号 1961年12月。
- 30 大和田茂「編輯主幹・浮田和民の位置」鈴木貞美編前掲書 p.195。

- 31 大和田茂前掲 p.213。
- 32 鈴木正節前掲書 p.22。
- 33 樽本照雄「呉棹翻訳目録」『清末小説から』第10号 1988年7月
- 34 前掲「呉棹翻訳目録」
- 35 景藏「今後雑誌界之職務」『東方雑誌』第16巻第7号 1919年7月。